

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月30日現在

機関番号：17702

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2010～2011

課題番号：22653101

研究課題名（和文） 近代日本のリベラルエデュケーションの遺産
—文化学院の教養教育と西村伊作—研究課題名（英文） The heritage of liberal education in modern Japan
—The education of BUNKA-GAKUIN and Isaku Nishimura—

研究代表者

平沢 信康 (HIRASAWA NOBUYASU)

鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授

研究者番号：70208817

研究成果の概要（和文）：1921（大正10）年4月から、卓越した教養教育を少数の女子生徒に施し始めた文化学院の設立に至る経緯と趣旨、および自身の資財を投じて創立を敢行し初代校長に就任した西村伊作(1884-1963)の人間形成と経歴について詳細に調べた。あわせて大正自由教育を代表する文化学院の学監、教授、講師たちの経歴および同校との関わりを精査し、カリキュラムを含め、芸術教育に主眼を置いた同校のリベラルな教育の歴史と特質を、社会背景と共に明らかにした。

研究成果の概要（英文）：The Bunka Gakuin, which was established in the district of Tokyo's Kanda Ward in April 1921 as a small-scale institution for the secondary education of young women, was among the so-called "new schools" founded during the Taishō period a private school. Its educational practices, which were part of the main stream of the so-called "new education" movement, were at the same time in the vanguard of the so-called Taishō free education movement and especially of "free education" in the realm of the arts. Nishimura Isaku, who provided the school's founding and was its first director recalls many of the "things which have greatly influenced the Bunka Gakuin since its very birth" by making use of such "key words" and phrases as Christianity, America, sexual curiosity or interest, globally oriented, and "prophetic." The basic personality and liberal thinking of Nishimura, who styled himself a "free thinker," had a direct or indirect influence on the school's organization and the content of the education that was offered.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
計	1,000,000	150,000	1,150,000

研究分野：人文社会学 教育史

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：(1) 大正自由教育 (2) 芸術自由教育 (3) 生活改善 (4) 近代日本の社会主義
(5) 大逆事件 (6) 近代日本キリスト教史 (7) 知識社会 (8) 治安体制

1. 研究開始当初の背景

ハーヴァード大学の A. ゴードン教授（日本史）は、今日までの 150 年間に東アジアで起こった十大事件の 1 つに「モダンガールの出現（1925）」を挙げている。

1921（大正 10）年 4 月に創立され、1925 年に上級コース（通称「大学部」）を加設した文化学院は、その学生たちの服装等からモダンガールとモダンボーイの巣窟と当時のマスコミに指弾されたが、それは教育勅語体制と臣民教育的な価値規範からの脱却を図った同校の自由な教育実践のゆえでもあった。

ところで大正期の特徴について、伊藤隆・東京大学名誉教授は『大正期「革新」派の成立』の中で、イデオロギーの内容よりも、革命と反革命とがないまぜになった現状打破の「革新」の時代として説明している。

西村伊作らは、まさに教育界の革新者であった。文化学院は外国語を重視してコスモポリタン志向の教育を施し、モダニズムの影響が色濃く、教育勅語体制の政治的・思想的・文化的な磁場を内破する革新的な学校であった。

文化学院のスリリングな歴史を詳細に明らかにすることは、教育史はもちろん、ゴードン教授の指摘する文化史的視点からも意義深く、日本近代史研究を豊饒なものとしえる新機軸を打ち出す研究の創出が可能と考えた。

2. 研究の目的

我が国では近年、大学における教養教育を再評価し強化すべしとの気運が高揚するなか、リベラルアーツが喧伝されている。リベラルアーツ学部を新設した私学もある。

リベラルアーツの伝統は極東にも及んだ。近代日本の教育史における遺産としては、旧制高等学校の哲学および外国語主体の教養教育やミッションスクールの西欧型リベ

ラルアーツ教育があるが、それらとは別に優れたリベラル・エデュケーションの例として文化学院の実践がある。

本研究は同校を取り上げ、その教育史的・文化史的・思想史的・知識社会史的な意義を探ることを目的とした。

従来、リベラリズム研究と言え、概ね政治史分野に限定されがちであった（例えば石橋湛山や清沢澗といった人物研究）。本研究は、それを教育史ないし学校史の領域を中心に開拓し、モダニズムと重ね合わせながら、新知見を得ようと企図した。

3. 研究の方法

(1) 教育史研究を、社会思想史や文化史の研究と架橋し、生活文化史の視点を重視した。

(2) psychohistory の性格と social history の性格とを架橋、統合するよう努めた。

(3) 教育史研究のなかの領域史として、高等女学校史、各種学校史、芸術教育史、大正自由教育史の視点を、それぞれ担保した。大正期の芸術自由教育を代表する学校であることから、特に近代日本芸術教育（実践）史上の貴重なケース・スタディとして文学、美術、音楽、舞踊の各教育実践についても意識して研究した。

(4) 日本教育史研究にはモダニズムの観点からの研究がなかったが、南博氏の主宰するグループが先鞭をつけた日本モダニズム研究を日本教育文化史の立場から発展させる意味で、学院の学校史・教育内容について、創設時から 1930 年代まで、モダニズムの視点から分析した。

(5) 明治期と大正期の日本社会主義史の歴史文脈を意識して、西村伊作の思想と行動、人脈について研究を深めた。

(6) 治安体制史の先行研究（主として荻野富士夫氏の業績）に学びながら、内務省当局による内偵から文化学院の閉鎖命令に至る抑圧・弾圧の歴史について調査分析した。

(7)史料については、先行研究が依拠してきた同校の五十年史や西村伊作の自伝以外に、当時の新聞報道、文化学院の学生による同人誌や学院の教員生徒が編集発行した新聞を紐解くことで、同校内の出来事のディテールを把握することに努めた。

4. 研究成果

(1)西村伊作の生い立ち、人間形成について詳細に調べ、わかりやすい家系図を作成した。また従来、自伝や先行研究で明記されてこなかった西村家の養子となった年月日や建築事務所を株式会社化した年月日等の確定を、裁判記録や登記記録で行いえた。

①学院を創設して卓越した教養教育を敢行した西村伊作の青年時代における英国流の教養教育を意識した山村での独学と欧米遊学の意義を押えた。

②同郷の佐藤春夫はじめ南紀知識人との親交、洋画家の石井柏亭、陶芸家の富本憲吉やバーナード・リーチ、歌人の与謝野晶子・鉄幹、童話作家の巖谷小波、洋画家・彫刻家の保田龍門などの芸術家との交流と、文化学院との関係を検討した。

③西村が大正 10 年 5 月に与謝野夫妻・堺利彦・沖野岩三郎を顧問として新設を計画した「西村芸術生活研究所」の事業構想の変遷と、文化学院創設との関連を明らかにした。

④初代校長に就いた西村は、与謝野寛・晶子夫妻らの協力により、わずか 33 名の入学生に対して、特別講師を含めて約 40 人の豪華な顔ぶれの教授陣をそろえることに成功したが、当代一流の人物を集め得た人的ネットワークは、いかにして築かれたのかを明らかにした。

(2)学院で教鞭をとった「教授」や非常勤講師たちの経歴ならびに担当科目を明らかにし、担当期間をも示したリストを作成した。同校所蔵資料に基づき作表した、この文化学

院講師陣リストについて、他の諸資料をつき合わせながら修正した。文化学院の教授、講師たちの経歴と、同校との関わりを精査した。

とくに影響力のあった与謝野晶子（開設時から学監に就任）については、創設に至るまでの教育思想を、晶子の数多い評論文の中から探し、女性解放の論旨との関連で、分析した。

1930 年代に入るとモダニズム文学の旗手と評された阿部知二が文化学院の教壇に立った。また、モダニズム文学の大同団結のため結成された「新興芸術派倶楽部」の約半数の作家が学院に関与したことから、文学史・文壇史と教育史をつなぐ研究を図りえた。

(3)学院内組織及び部局長の変遷史を図示した表を作成した。その過程で、同校「大学部」では当初、その本科をリセ、美術科をアカデミとフランス語で別称していた記録を発見し、同校のポストセカンダリーコースないしは高等教育段階の学科制度構想が、実はフランスの学制をモデルにしていたことが判明した。この史実は、同校の 50 年史でも言及されておらず、先行研究でも指摘した研究者は皆無であり、本研究のテーマに即した最大の発見であった。

(4)良妻賢母主義を超える、非臣民的・非実学的な教養教育を企図したため、高等女学校令に拘束されぬよう各種学校の道を主体的に選択した文化学院ではあったが、そのカリキュラム面での特色を明らかにした。

文化学院の設立趣意書をはじめ、カリキュラム関係資料を精読し、残されている資料をもとに、一部年度については時間割表も活字化して復刻した。

(5)西村伊作による欧化生活の試みと生活改善の探求・提言の研究を進めた。

①明治後期以降に彼によって試みられた洋服や洋食の採用、洋画の実作、写真撮影、米国製オートバイの購入、バンガローや自邸（スイス・シャレー風洋館）の建築設計あるいはインテリアの工夫等の実践を、近代日本の生活文化史に位置づけた。

②第1次世界大戦中から戦後にかけて推進された内務省や文部省による生活改善運動に関する政策についての先行研究をおさえ、史料を基に西村の関わりを調査した。

③西村による生活文化の改善の提唱と実践内容を明らかにした。彼は衣食住の中でも、とりわけ住宅の質的向上に意を払い、オピニオンリーダーとして活躍していたが、彼の「文化生活」の探求とは、どのようなものであったのか考究した。子供服の洋服化の提言と妻を督励して刊行された子供服のデザインブックをも併せて分析した。

④「文化生活研究会」へのコミットメントについて調査した（主宰者の森本厚吉や有島武郎や吉野作造との人間関係も含む）。森本厚吉の文化生活思想・文化事業と西村のそれとの異同を明らかにし、『生活を芸術として』等、文化生活研究会から刊行された西村の著書を分析した。

⑤雑誌『文化生活』『文化生活の基礎』へ西村が寄稿した多くの記事を分析した。文化学院の校名からも察せられる様に、同校の創設は、当時の「文化生活」への国民の憧憬と無縁でなく、生活改善運動などとも関連を有するものであった。そうした社会文化史的連関を探り、建築史や住宅政策史との関連を意識した。

⑥文化学院の校舎は、西村自身が設計した簡素な洋館であり、彼は物理的な教育環境を重視したが、西村の建築思想とは、いかなるものであったかを明らかにする。西村による建築事務所の開設と洋風住宅や倉敷教会などの設計（初期文化学院のイングリッシュ・コテージ風校舎を含む）のデザイン思想にみるモダニズムと伝統回帰との両義性を考究した。

⑦雑誌『芸術自由教育』へ寄稿した西村の論説・記事を分析した。

(6) 教育内容の分析

学院における教育とユースカルチャーの諸相を、服装、文学、舞踊、工芸などにわたって調査し、それを担った教授陣の経歴・専門・思想性と共に、欧米のモダニズムの潮流を背景としつつ明らかにした。

①リトミックとモダンダンスに触発された舞踊教育の山田耕筰による実践と、明星舞踏会と称される社交ダンスの草分けとなった同校講堂における講習会とにより、我が国近代舞踏史において文化学院が特筆すべき位置を有することを明らかにしえた。

②与謝野晶子が編纂した国語読本、文学教科書を分析した。

(7) 異端性の把握

洋風校舎といい、男子の中学校に優る教育水準といい、また我が国中等教育機関で初めて共学を試行した点といい、勅語奉読をしない学校運営といい、新奇かつ斬新な学校であったため、同校は創立期および戦時体制下に当局の内偵を受けていた。なぜ、「思想家」の巣窟として治安当局から危険視されたのか、大逆事件にさかのぼって政治的に明らかにした。この観点からの研究および治安体制からの緊張感を伴った視点が、旧来の文化学院研究では実証的に手薄であった。

今後の展望

研究成果を学術書などにまとめることができなかつた。進捗の遅れている要因として、以下が挙げ得る。文化学院に関係した知識人や芸術家に超一流の人士が多く、彼らの残した文献および関連先行研究の情報量が膨大なため、探索と整理に時間がかかっていること。勤務校の講義・演習の関係でウィークデイに上京出張して文化学院図書室で閲覧できないため、一次史料を十分に読みこむ十分な時間を確保しにくかつたこと。現下の文化学院の経営難、経営陣の刷新と新体制への移行にともなう職員の配置転換、一部資料の保

管場所移転（埼玉県某所）などのため、確認したい歴史資料のうち、アクセスに制限が設けられたこと。

今後は、以下の資料を読み込むことで進展を図りたい。

(1) 文化学院にコミットした学者・知識人や芸術家の全集、著作集、日記、自伝や評伝などを丹念に調べ、同校への関与の事情と役割、教育実践の性格を明らかにしたい。

(2) 文化学院の図書室で写真撮影してきた新聞雑誌の記事を精読する。

(3) 戦時中の西村伊作を被告とする公判記録の複写を入手できたので、詳しく分析する。

(4) 「占領期新聞・雑誌情報データベース」を活用することで、1940年代後半に西村伊作が執筆した雑誌記事100点以上を検索できた。長女アヤや、その妹（いずれも同校教員）の記事も少なからず把握できた。今後、それらを徐々に入手して分析したい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）

- ① 平沢信康 「西村伊作によるコテージ風教育 / 学習空間の建築設計—（その1）文化学院創立時の校舎について—」『学校空間の研究』No.2、2011年、4～6頁、査読無。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 平沢信康 「文化学院の教養教育とモダニズム—1920～30年代のリベラル・エデュケーション—」教育史学会第55回大会、2011年10月2日、京都大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

平沢 信康 (HIRASAWA NOBUYASU)
鹿屋体育大学・スポーツ人文・応用社会科学系・教授
研究者番号：70208817